

本田一成著『オルグ！オルグ！オルグ！労働組合はいかにしてつくられたか』
新評論（2018年）

『オルグ！オルグ！オルグ！』というタイトルからもわかるように、本書は労働組合の組織化とその中心的な担い手であるオルガナイザーに焦点をあて、数多くのインタビューをもとにこれまでの流通産業における労働組合の組織化と流通産別の統合の歴史を描いている。著者の『チェーンストアの労使関係—日本最大の労働組合を築いたZモデルの探求』（2017年、中央経済社）を読んだ読者もいると思うが、本書は「講義形式」で叙述されているため、前著の研究書のスタイルよりも読みやすい印象がある。また、登場する組合やそこで起きた出来事は一部重なってはいるものの、オルガナイザーという“人”がクローズアップされているせいか、登場するオルガナイザー一人ひとりの人生に強く引き込まれながら、ストーリーを追って読み進めることができ、前著の内容への理解がより深められたようにも感じた。さらに、彼らが組織化した企業について、創業者の生い立ちから組合結成前後までの詳細な歴史が綴られており、流通産業の経営史を知ることでもある。

本書の構成は大きく2つに分かれており、主に、前半はゼンセン以外の労組、後半はゼンセンについて取り上げている。まず、前半の第1章～第5章では、1949年の全百連の結成から1970年前半ごろまでの、商業労連、全国チェーン労協、同盟流通といった全織同盟以外の組織に焦点をあて、各組織の組織化の動きとともに、「流通産別構想」をめぐる交錯した状況が詳細に記されている。第5章では、ゼンセンのチェーンストアの組織化に合流せずに無所属主義を貫こうとした“アンチゼンセン”の労組に注目しているが、この“アンチゼンセン”という存在から当時のチェーンストア労組に対するゼンセンの影響力の強さが理解できると同時に、その後長い時間を経た産別合同の困難さの一端もうかがわれる。

後半の第6章と第7章では、「ゼンセンとオルグ」と題してゼンセン三大オルグの1人である故佐藤文男氏を中心に、ゼンセン専従のオルガナイザーの活動を辿っている。佐藤ご夫妻による「夫婦労働運動」や、「佐藤方式」と呼ばれた集団組織化、チェーンストア労組の組織化への舵切りなど、オルガナイザーの「人」の歴史とともに、全織がゼンセンへと産業別組織として大きく転換した様子が描かれている。（筆者個人としては、漢字の「全織」同盟からカタカナの「ゼンセン」同盟になったエピソードが面白かった）

第8章以降は、1970年のゼンセン同盟流通部会の結成前後以降のチェーンストアの組織拡大から、佐藤氏がオルガナイザーの集大成として取り組んだ専門店チェーンの組織化と新たな加盟形態をとったSSUA（専門店ユニオン連合会）の結成、フード・サービス部会、専門店部会の結成などによる複合産別への移行、そして、UAゼンセンの結成に至る産別合同の状況などがまとめられている。

全体を通じて、ゼンセン、ゼンセン以外を問わず数多くのオルガナイザーが登場するが、個々のオルガナイザーが複数の場面に姿を現し、ゼンセンのオルガナイザーとゼンセン以外のオルガナイザーとの間にも、様々な接点や関係性があったことが確認できる。そうした面からも流通労組の分断と統合の複雑な歴史が読み取れる。他方、女性パートタイマーを中心とした非正規労働者の組織化が近年のゼンセンの組合員数の増大に大きく寄与してきたことは周知のとおりであるが、ゼンセンのオルガナイザーがチェーンストア労組におけるパートタイマーの組織化についてどのように関与したのかについても、ぜひ聞いてみたい。（後藤 嘉代）